

- 1 派遣期日 平成28年11月19日(土)
- 2 研修先 学校名(会場名) 茨城大学附属中学校  
所在地 水戸市文京1丁目3番32号  
<http://www.jsch.ibaraki.ac.jp>

### 3 研修内容

研修校研究主題

21世紀を生きるための「教養」を高める学びの創造(3年次)

#### (1) 茨城大学附属中学校の研究の概要について

この研究は、自己の生き方の基盤となるものを、「21世紀を生きるための教養」ととらえ、それを高める学びの創造を通して、自己を確立する生徒の育成を目指したものである。教養を高める手立てとして、学ぶ意欲を喚起する課題の設定や見通しを持つガイダンスの導入、自己の学びを支える協同の学びなどを取り入れ研究を進めていた。協同の学びを支える手立てとして「ERD活動」というものがある。

「ERD活動」とは「Encounter Recognition Development」の頭文字をとったものであり、それぞれ「グループの中での友との出会い」「友についての再認識」「人間関係の広がりや深まり」を意味したものである。「ERD活動」のねらいとして次の4つを設定している。他の人との関係づくりを通して自分自身を見つめ、人としての生き方を考える、人と人とのよりよい関係を築いていくための基本的なスキルを体系的に学ぶ、自分や他者の存在を大切にする心を育成し、よりよい人間関係を築こうとする態度を養う、自分を開き、他を受け入れようとする態度を養う、である。このような「ERD活動」を学年や時期、学級の実態に合わせて実施することで、学び合う基盤として聴き合う関係づくりを進めてきたということであった。他にも教養を高める手立てとして、「問い、考え、表現する」ことを重要と考え、授業づくりを進めていた。

「問い」は、既存の知識や経験のずれから生み出され、「問い」を自ら解決しようと自らの意思で対象にはたらきかけることで学びは主体的なものとなることを基本の考えとして捉え、授業では、「問い」が生まれる課題を設定することが大切であるとしている。

「考える」とは、「問い」の解決を目指し、様々な知識や体験をつなぎ合わせながら分析、解釈、検討、吟味、創造することであり、授業では、他者とお互いに考えを表現し合う場面を設定し、自分たちなりの新しい価値を創り出していくことと捉えている。

また、「表現すること」で、新しい問いが生まれ、解決を目指して新たな知識を集め、それをもとに表現し合いながら課題解決を目指すことと捉えている。

具体的には下の図の過程を取り入れて授業づくりを行っている。この探求の過程のモデルを使い、課題解決のために、どのようにしたら解決できるか方法を考え、見通し・計画を立て、実際に計画を実行し、調査や試行などの活動により成立するという体験を重ねるというものである。また、結果について考察し、これまでの成果を検証し、うまくいかなかった部分を修正することで課題を解決し、また新たな課題の解決を目指す。これらをスパイラルで行うこと、活動の中で協同的に他者とかがかり合いながら学ぶことを通して、「教養」を高め、自己の生き方の基軸となるものをつくるという研究である。

#### 探求の過程のモデル

課題→解決への見通し→活動（体験）→考察・吟味→評価→修正→新たな課題

#### (2) 授業参観について

授業を参観を通して、今後の英語教育の方向性を見出すことができた。

まず1点目は、初めから終わりまで終始オールイングリッシュで授業が行われていたことである。ALTとのTTの形式で授業が行われていたが、役割分担を明確にした授業が行われていた。ALTが中心となり授業の流れをつくり、HRTがスローラーナーの支援に入っていた。また、インタビュー活動の進め方の説明などALTが英語で行い、授業を進めていたのが印象的であった。生徒の様子を観察すると活動の仕方に戸惑いが見られる生徒もいたが、教え合ったり、HRTがアシストに入ったりしながらスムーズに活動する姿が見られた。しかし、生徒同士で教え合う場面では、日本語を使っていたので、どの程度、オールイングリッシュを徹底するのかは、これからの課題となると思われる。

2点目は、生徒同士が会話をする活動を多く取り入れる工夫である。授業での活動は、前半はペアで行うインタビュー活動を行い、後半は、発表資料を基にしたプレゼンテーションを行うという流れであった。インタビュー活動では、AペアでインタビューしたことをBペアの人に伝えるなど、質問するだけでなく、inputしたことをoutputする活動も行っていた。プレゼンテーション活動でも紙の裏には発言する内容のメモは書かれていたが、生徒たちは懸命に英語を使い、3人グループで順番に調べた内容を伝えていた。つまりながらではあったが、知っている単語をつなげ、英語で表現しようという意欲が見られた。

3点目として、活動の時間の明示がある。それぞれの活動は3分間など明確に時間で活動が区切られていた。時間で区切ることで活動にメリハリができ、意欲的に活動するきっかけとなっていると感じた。

#### 4 感想

授業参観を通して考えたことは、自分の授業との比較である。自分が今、展開している授業は、どちらかという基礎・基本の定着を目指したもので、教科書の表現を身につける活動が中心になりがちである。しかし、参観した授業は、英語を活用するものが中心であり、基礎・基本の定着の上に成り立つ活動が多い。また、生徒自身が言葉を考え、つなぎ、英語で伝える活動が多い。たしかに基礎・基本の定着も大切であるが、今後は活用する場面、生徒の発想が生きる自由度が高い活動を取り入れて授業展開していきたいと考えた。また、私は今、1学年と2学年を担当している。ALTと協力してオールイングリッシュにトライすることも高校の授業につなげていくためには重要であると感じた。